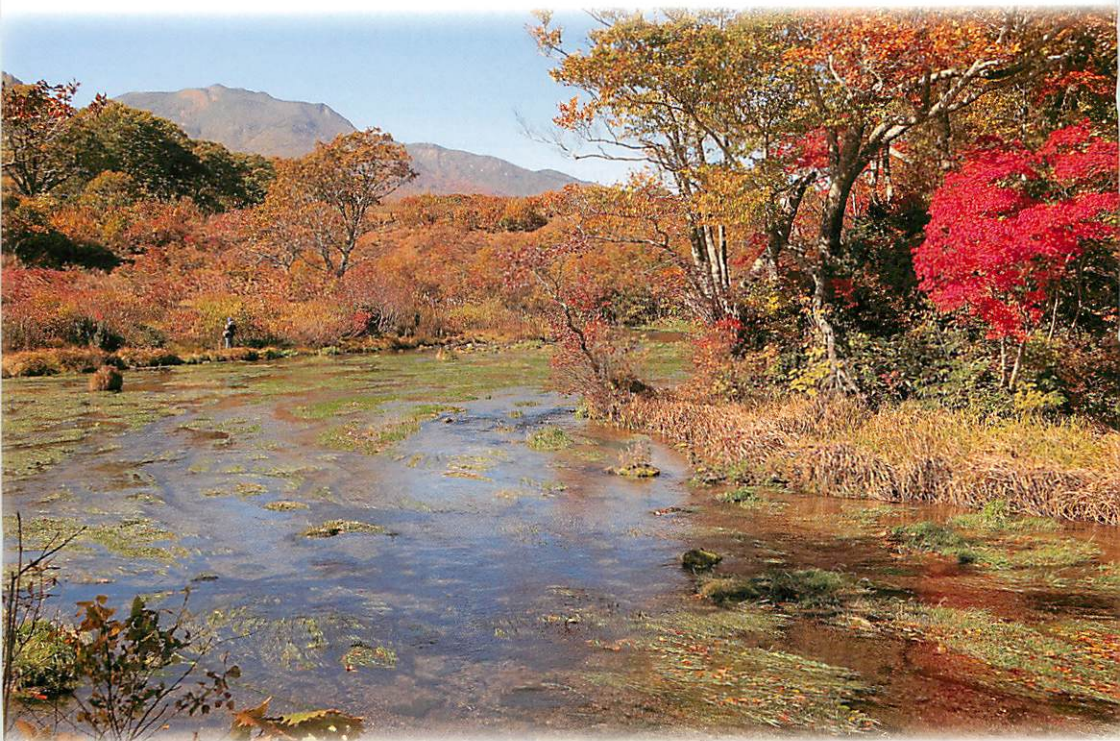


甲田の裾

KŌDA NO SUSO



2012

秋

4号

松丘保養園の機関誌

松丘保養園のインターネットホームページ

<http://www.hosp.go.jp/~matuoka/>

自治会館改修へ



34年間の長きにわたり、入所者と苦楽を共にした自治会館は、老朽化の為改修工事に入り、来年4月「老人福祉会館」として生まれ変わります。

甲田の裾 平成24年4号 目次

平成24年の年の瀬を迎えて… 松丘保養園園長 福西 征子 … 1
ロシアにおけるハンセン病制圧活動 ……WHOハンセン病制圧特別大使 笹川 陽平 … 6
ぶらり広島・呉・厳島 …………… 耳鼻科 丹藤 淳 … 14
証 “イエスは私を救った”、3 …………… 神子澤新八郎 … 19
人事異動 …………… 24
野の花の微笑み …………… 比良 信治 … 25
自治会日誌 …………… 33

表紙写真 「秋のグダリ沼」 叶 順次
写真提供 福祉室・編集局
※菊池盈 「命あったからこそ」は休載中です。
※白樺短歌会は今号はお休みです。



平成二十四年の年の瀬を迎えて

松丘保養園園長 福西征子

一・今年の出来事を振り返って

毎年、年末が近づくと、過ぎ越した一年を振り返るものですが、今年もまた、目まぐるしくも慌ただしい時を過ごしたものと、改めて思いました。良いことも悪いこともありましたが、以下に、そのうちの主な出来事を簡単にピックアップしてみました。

まず、年が明けて直ぐ、欠員だった副園長職に川西健登先生が採用になりました。真面目な熱意ある先生の今後の活躍を心から期待しております。

桜が終わり近くなった五月十一日～十二日に

は、第二十四回コ・メディカル学術集会（於松丘保養園多目的大ホール）が、また、五月十二日～十三日には、第八回ハンセン病市民学会総会・交流集会・分科会（於青森市民ホール・新城典礼会館・松丘保養園 松丘会館 文化センター コミュニティーホール 図書娛樂室）が開催されました。この二つの学会は、ほぼ同時日の開催でしたので、なかなか忙しい思いをしました。

その二ヶ月後、暑い最中の七月三十一日には、法務省主催の「ハンセン病に関する親と子のシンポジウム」（於青森市民ホール）が開催され、シンポジウムと講演のコーディネートを保養園が受

け持たせて頂きました。

八月には恒例の、青森県庁のご招待で、「ねぶた祭り」を楽しみました。

保養園関係の本の出版も行われ、「松丘保養園百周年記念誌」公刊後、「語り継がれた偏見と差別」、「松丘保養園の人々 日々の生活」「松丘保養園看護学校の思い出」などが発刊されました。

特に、「松丘保養園看護学校の思い出」は、平成八年に附属看護学校が閉校になった時に公刊できなかった記念史を、第一期生の工藤高尾さんに呼びかけて編纂したものであり、大変感慨深いものがありました。

二、松丘保養園将来構想の認可

しかし、最も重要な出来事は、「国立療養所松丘保養園将来構想(案)」が、厚生労働省、青森県・青森市の了承の下、十一月一日を以て、東北厚生局から正式に認可されたことだと考えております。

将来構想は、十数年以上も前から、保養園入所者・職員があげて考えて来た事案であり、認可された時は、「ようやく最初の一步が踏み出した」という安心感と、「引き続き、次の一步を考えなくてはならないだろう」「これまでとは違った環境を受け止めなくてはならない時代に入ろうとしている」という、緊張感と解放感がないまぜになつたような感慨がありました。

今後、来年三月末までに、厚生労働省の指導を仰ぎながら、「松丘保養園将来構想」の核心部分の、「入院病床五床の保険診療」に関わる具体的な指針を作成して行くことしております。

思えば、今年の念頭の所感に、「保養園の将来構想案」と題した一項を書いた記憶があります。その時は、まだ確たる見通しは立っていませんでしたが、認可まで漕ぎつけることができたのは、地域市民の皆さま、青森県・青森市健康福祉部、医師会、厚生労働省などのご支援の賜であると考えています。

この将来構想を第一歩として、「国立の医療機

関として、入所者の最後の一人まで、現在地の療養所で療養生活を続けられるようにする・・・」
と言う入所者の皆さんの切なる希望を叶えられたら、と思つています。

また、最近、「入所者がいなくなった後のハンセン病療養所の将来構想・後利用」の検討委員会の開催が計画されております。これについては、保養園は、旧火葬場、天理教教会、三つのキリスト教教会、楓林寺（佛教）および、中條資俊初代園長が築かれた弥廣神社などを頂く楓公園全体、納骨堂、そして、その続きのエリアに建築を計画している資料館、および、松丘会館、そして、旧本館跡地の小さな森林地帯を保存すべく、申請したいと考えています。

これらは、松丘会館を除くと、いずれも旧土塁に沿つており、保存に適したエリアにあります。ただ、未だ議論の方向性が定まっていけないこともあり、今後、更に検討を繰り返す必要があるでしょう。

三、入所者の高齢化と嚥下障害

入所者の高齢化に伴う合併症の増加・後遺症の進行については、いまさら言うを待たないことですが、なお、皆さん方に理解して貰いたいのは、

「誤嚥・嚥下障害」です（ハンセン病療養所における嚥下障害とは、一般の病院・療養所で見られる嚥下障害とは、若干、趣が違ふところがあります）。普通、誤嚥による肺炎を誤嚥性肺炎と言いますが、これは、細菌が、唾液や胃液と共に肺に流れ込んで起きる肺炎です。高齢者に多く、再発を繰り返すことがあります。その結果、抗生物質に対する耐性を持つ菌が発生して治療が難しくなり、多くの高齢者の死因の一つになっています。

誤嚥の原因は、脳卒中や全身麻痺、または、一見、麻痺が見られない脳梗塞の患者さんなどで、嚥下反射や（痰を喀出するための）咳反射の低下などがあると、（患者さん自身が）知らないうちに細菌が唾液と一緒に肺に流れ込みます（微量誤嚥）。この流れ込んだ細菌が、肺の中で増殖して誤嚥性肺炎を起こします。

また、胃液などの消化液が、食べ物と共に食道を逆流して肺に流れ込み、誤嚥性肺炎を起こすこともあります。

上記の他に、食道や気管の嚥下機能の低下によつて、相当量の食べ物、食道に入らず、誤つて気管に入つてしまうと言ふ誤嚥もあります。ハンセン病後遺症のある患者さんの中には、前述した微量誤嚥だけでなく、この手の誤嚥も多く見かけます。例えば水ですが、スツと素速く流れやすいため、ゴックンと食べ物を呑み込む運動が完全に終了しない内に喉を通り過ぎて、気管に流れ込んでしまうのです。その後に、ゴックンという運動が終わるのですが、既に遅く、喉頭から気管に流れ込んだ水によつて、ゴホゴホゴホと咽せている高齢の患者さんをよく見かけます。

一方、ハンセン病後遺症として、唇の動きや、頬の筋肉などの機能が低下している患者さんが少なくありません。これらの人々は、普通の人より、食べ物を喉まで送り込む力が弱く、また、食べ物の一部が口内に残り易いため、後で、これが誤嚥

の原因になることがあります。勿論、嚥下力も低下しています。

従つて、ハンセン病後遺症による嚥下障害と、脳卒中などによる嚥下障害が重なると、より重症の嚥下障害を来すことがあります。その結果、反復性誤嚥性肺炎を起こし易くなります（抗生物質投与などの治療方法は専門的になるので、ここでは省きます）。

年を取るに連れて、誰でも誤嚥を起こし易くなるのですが、その予防として、日常的にどのような事に気を配れば良いのかを、以下に記して見ます。

- ① 毎日、歯磨きを怠らずに行い、口内の雑菌を減らす。
- ② 毎日、「うがい」をする。
- ③ 食後すぐに横にならず、一定時間、座位を保つて胃液や食物の逆流を防ぐ。
- ④ 歯茎マッサージをして嚥下機能（ゴックンすること）を改善させる。

他にも有効な予防方法があるかもしれないので、

耳鼻科などで聞いてみるのも良いでしょう。

年を取っても、誤嚥しない強い強い嚥下反応を維持できるように努力して下さい。

一旦、誤嚥が始まったら、医師や看護師やSTの指導の下、ゼリー食、ミキサー食、刻み食などを病状によって選択して下さい。ゆっくり喉を通りすぎて行く食べ物を、ゆっくり時間をかけて丁寧に食べるように努めて下さい。

食べ物を食べるのは、日々の大きな楽しみです。「口から食べ物を食べる」という行為がどれほど大事なことか、その行為を失うことによって、生きる喜びだけでなく、生きる気力も失うのだと言うことを、医師やコメディカルスタッフは、これまで以上に理解して頂きたいと思います。

治療のプロセスで、一時的に絶食をしなければならぬことがあります。高齢者は、ちよつとした短期間の絶食でも食べることを忘れてしまうことがあります。安易な絶飲食を選択せずに、可能であれば、ゼリー食でも良いから、食べる試みを続けるようにしたいものです。

四. 終わりに

今年も年の瀬が迫って来ました。今夏は酷暑に喘ぎましたが、この冬がどのようなものになるか、まだ見当が付きません。

暖冬という天気予報の通りであれば、仮設宿舎に住まわれている東日本大震災の被災者の皆さん方にとつては、比較的話ではあります。より過ごしやすいことになるのではないかと推察いたします。

十一月二十日過ぎから降りはじめた雪と寒さの中でこの文を書いております。

衷心から皆さま方の御健康と御多幸を祈念申し上げます。

平成二十四年十二月一日記

ロシアにおけるハンセン病制圧活動

WHOハンセン病制圧特別大使 笹川陽平

二〇一二年六月二十九日から七月三日まで、ロシアの南部にある三都市のハンセン病療養所（アストラハン、テルスキ、アピンスキ）を訪問した。

毎年WHO（世界保健機関）は、管轄地域ごとに世界のハンセン病の最新データを発表している。地域は、東南アジア、アフリカ、西太平洋、アメリカ、中東、そしてヨーロッパの六つに分けられているが、そのなかで最大の面積を占め、西ヨーロッパから中央アジアに広がる五十三国を管轄するヨーロッパ地域のハンセン病データが唯一ごっそり抜け落ちている。

現在ヨーロッパには、ハンセン病に対する問題はあまりないが、多少のケースは報告されている。そのほとんどが西ヨーロッパから発見され、途上国からの移民が主な原因であると言われる。一方、国によっては、ハンセン病は報告する必要がない病気であると判断し、データを消去してしまう国もあるようだ。WHOハンセン病制圧特別大使として、ヨーロッパ地域で何が起こっているのかをこの目で確かめる必要があると感じ、今回訪れることを決めた。

特に関心があるのは、ロシアとカザフスタン、タジキスタンなどの中央アジアの国々である。全

旅程に同行し、サポートしてくれたのは、ドイツ人女医ロマナ・ドラビツクさん（75歳）だった。ドイツ西部のディンスラーケンという町で八年前まで開業医として働く傍ら、個人的な使命としてハンセン病患者、回復者に対する支援活動を三〇年以上続けている。彼女が初めて患者に出会ったのは、観光旅行で訪れたケニアのモンバサであった。

道で物乞いをする患者を見て驚き、「こんな人を放っておくなんて、行政は何をしているんだ」と市長のところへ直談判しに行ったという行動派である。その後、「ハンセン病患者とともに生きる」と誓った彼女は、支援物資を携えてインドやアフリカを駆け回った。一九九〇年初頭に活動地域を旧ソ連の国々にも広げ、各地の療養所へ地道にコソクトを取って足を運び続けた。ロシア各地のハンセン病専門家にも顔がきき、彼女の構築した人脈がなければ、今回の視察は実現できなかった。

私の最初の目的地は、ロシア南部のアストラハ

ン国立ハンセン病研究所だった。モスクワから飛行機で二時間、カスピ海に近いアストラハン州の州都は人口五〇万人ほどでヴォルガ川のデルタ地帯である。一九八六年に開設されたハンセン病病院に併設して一九四八年に建てられたこの研究所は、旧ソ連の時代からハンセン病研究と技術指導が中心で、現在はヴィクトール・ドユイコ所長のもと、ロシアをはじめ独立国家共同体（CIS）加盟国のハンセン病の活動拠点になっている。

アストラハン到着の翌日、ハンセン病研究所でロシア及びCISのハンセン病専門家が集まって会議が行われた。タジキスタン、トルクメニスタン、カザフスタン、そしてウズベキスタンから専門家が集まり、現場のヘルス・ワーカーにどのようなトレーニングをしているのか、ハンセン病に関する正しい知識をどのように広めているか、などの取り組みについて発表が行われた。WHO世界ハンセン病プログラムのスマナ・バルア代表もインドから駆けつけ、WHOの行っているハンセン病対策について紹介するとともに、今後はロシ

アをはじめとするC I S地域の国々とも綿密に情報交換の必要性を述べた。



独立国家共同体の専門家が集まり開催された会議

アストラハン研究所員は、「ロシアにおいてここ三、四年の間に新規患者は発見されてなく、二〇一二年初頭の時点で、三八二名の患者が登録されている」と報告したが、この数字については慎重に捉える必要がある。WHOの基準によると、ハンセン病は六カ月ないし十二カ月の投薬で完治するため、完治した患者は登録簿から削除される。しかしロシアでは、一度罹患した患者は完治しても登録され続けているため、どれだけ患者が治療を完了しているのかが、この報告からは読み取ることができない。WHOによる正確なデータ整理が必要であることを実感した。

アストラハン研究所は、回復者が利用する療養所の機能ももつ。数十年生活している人から、リハビリやその他の疾患治療のためショートステイを利用している人まで、声をかけて回った。鮮やかなブルーの外壁の二階建て、ベランダが各階をぐるりと取り囲む可愛らしい家の一室に、マリヤさん（62歳）とニーナさん（58歳）の姉妹が滞在していた。座り心地の良さそうな安楽椅子とシン

ブルなベッド、戸棚が置かれ、壁に大きな絨毯が飾られた趣味のいい部屋であった。「お医者さんや看護師さんには大変良くしていただき有り難く思っています」と短期の滞在を楽しんでいた。

「ヴィクトールさんが所長になってから、アストラハンでの患者の暮らしは良くなった」と言う。確かに、青くてきれいな芝生が広がり、花壇には色とりどりの花が並び、可愛い鶴や蓮の花の置物が取り囲む小さな池まで整備され、家庭的な心のなごむ雰囲気であった。一方で、三メートルほどもある真っ白なレーニンの像や、ハンセン病患者専用の刑務所跡など、ソビエト時代の名残もあった。

アストラハン近郊のハンセン病回復者が住むウオストチノエ村は、市内から車で田園地帯を約一時間の人里離れた場所にあった。一九六〇年、政府がハンセン病治療の終わった人たちに住宅を提供したのがその始まりで、その後回復者以外の人たちが集まりここで暮らすようになった。現在、

一、〇〇〇人いる住民のうち、回復者の家族はわずか十五世帯である。



治療のためアストラハン療養所を訪れていたマリアさん

「到着しました」と車を降ろされた場所は、幅四、五〇メートルの砂利道のど真ん中で、人の姿はまったく見えず、どこが村なのだろうかと少々戸惑いを感じたが、よく見ると確かに道の両脇に木片やトタンで出来た古ぼけた塀と、その向こうの茂みに隠れた屋根がちらりと覗いていた。ヴィクトールさんがそんな塀のうちの一つを押開けると、庭の家庭菜園の向こうから老夫婦が姿を見せた。この家で年金生活をしており、柔道をしている十代の息子さんとの生活には満足しているようであった。

また別の家には、夫に先立たれた76歳の女性が一人暮らしをしており、年金、月額約六、〇〇〇ルーブル（約一四、〇〇〇円）で暮らしている。家にガスと水道は通つてなく、水道管を引くための工事は五、〇〇〇ルーブル（約一二、〇〇〇円）で、それが工面できず不便な暮らしを余儀なくされ、その上「アストラハン療養所に短期滞在し、家を空けている時に泥棒に入られ、貴重品やアイロンなどの生活用品まで全部盗られてしまつ

た。現在生活が非常に困難だ。ソ連が崩壊してから、村の人口は減り続け、若い人は大都市に移つてしまい、年寄りしか残っていないのだ」と、私に窮状を訴えた。

二日間のアストラハン滞在を終え、私たちは次の目的地、テルスキハンセン病療養所を訪問するため、宿泊地予定のゲオルギエフスクを目指して出発した。九人乗りのミニバスに揺られ、カスピ海を背に内陸に向かつてひたすら西へ向かう。三六〇度地平線で囲まれ、乾燥した草原地帯が広がる何もない道を走ること四時間。昼食休憩のために立ち寄ったのが、ロシア連邦に属する自治共和国カルムイクの首都エリスタという街だった。こゝは、ヨーロッパ随一の仏教国とも言われ、人口が三〇万人に満たない小国である。カルムイクとはトルコ語でイスラム教に改宗しなかつた「留まった者」の意味で、もともとカルムイク人はチベット仏教を信仰する遊牧民族だった。一八世紀後半、ロシア人やウクライナ人などの移住者に改宗を迫られたため多くの仏教を信仰する民族が

新疆ウイグル自治区方面に帰還する中、地形的理由から戻ることができなかつた人々が留まつてきたのがこの国だといわれる。挨拶に来てくれたエリスタの保健局長も、私たち日本人と似た顔であつた。食後見学したチベット仏教の釈迦牟尼寺では、モンゴルをはじめアジア系の顔立ちの人々が荘嚴な雰囲気の中祈りを捧げており、周囲に仏教地域がないこの離れ小島のような国で仏教が息づいていることに、歴史に翻弄された民族の悲劇を感じざるを得なかつた。

カルムイク共和国に別れを告げて、南に向かつて走り続けると、突然、広大な向日墓畑に遭遇した。全く同じ方向を向き、理路整然と並ぶ無数の向日墓。その畑に、数度ではなく、何十回と出会うのである。畑であるにも関わらず、それを管理する人をついに一度も見かけなかつたのが何故なのかは、今でも分からない。

アストラハンを発つてから十一時間後の夜七時過ぎ、ようやく、ゲオルギエフスクに到着した。

七月二日の朝に、テルスキハンセン病療養所を訪問。創立百十五年を数える、ロシア最古の療養所である。現在、五十一人の利用者と、四十三人のスタッフがおり、私が今回訪ねた他の施設同様、テルスキはハンセン病を過去に患い、治つた後も様々な社会的理由からここに留まる事を選んだ人々の終の棲家となつていた。加齢に伴う病気を中心に、医療的ケアも必要に依じてなされていた。短期滞在していたある高齢の女性は、「子どもたちは私がハンセン病であることを知っているが、孫や近所の人々は知らない」と言葉少なに語つた。柔らかな表情で迎えてくれる回復者だが、カメラ撮影の了解にはほとんどの人がニエツト（NO）の反応で、写真が公表されることによる差別を恐れている様子で、他国では経験しないことであつた。

その後所内の病院に案内され、薄暗い玄関を通ると、見事な風景画が二枚と人物画が二枚。特に人物画の一枚は、船上で船乗りが賑わっている様子が描かれ、今にも絵の中から人が飛び出してき

そうなくらい、躍動感溢れる傑作であった。誰が描いたか尋ねると、昔この病院にいた人だと言う。こんな僻地に、これほどまでに素晴らしい絵を描く回復者がいたことに驚いたが、悲しいことに作者の名前は誰一人として知ってはいなかった。



テルスキ療養所に飾られていた躍動感溢れる絵画

ロシアの最終日、黒海方面を目指し北コーサカス西部に位置するクラスノダールという地方にあるアピンスキ療養所を訪れた。この療養所の創立は一九〇五年に急増したハンセン病患者を収容するために軍医によって建てられ古い歴史を持ち、その時の肖像画が所内の壁に掲げてあった。三〇年間アピンスキで所長として働いた父の後を継いだ副所長のマリーナ医師はここで二十九年働いており、お父さんが所長時代には五百人の患者が暮らしていたが、現在は四十人、それに対して職員は何と三倍以上の百三十一人もいると言う。一番最近の患者は、二〇〇九年に入所してきたのとだった。回復者のおばあさんに、「お名前は？どこから来て、何年間ここに住んでいるのですか？」と聞くと、彼女が答えようとするより先に、横にいた職員が「彼女はカーチャさん、四〇年間住んでいます。アストラハンから来ました」と話しました。私が「本人の口から直接話が聞きたい」と言うのだが、付け入る隙がない。最後までゆっくり回復者と会話することができなかった。

「なぜこれだけ素晴らしい施設で優秀な職員も

多く、病床も余っているのに、ハンセン病以外の病気を診ようとしなくていいのですか」と職員に尋ねると、「ここはハンセン病専門の病院と法律で定められているので、他の病気を診察することができない」ときっぱりとした口調で答えた。WHOの方針であるインテグレーション、すなわち総合病院への方策はここロシアやウクライナでは実施されていないなかった。また、何十年もハンセン病の「元患者」が暮らしているとのことだが、自分の家に帰ることができるのか、と聞くと、「もちろん可能であるが、様々な社会的理由からそれが叶わないことが多く、そのような人たちがここに暮らしている。この療養所では手厚いケアがなされ、衣食住に困ることはなく、新聞、雑誌、テレビも無料で楽しめる、義肢義足も提供され、皆充実した人生を送っている。何もここから出ていくことはない」ということが一致した答えであった。

果たしてこれで良いのだろうか、彼らの苦難に満ちた人生はいったい何であったのだろうか、このまま我々が単純に忘れ去っていいのであろうか。

起こったできごとを「記録」として残すことはもちろん一人一人の生命の証を、記憶が薄れないうちに形にして残す必要がある。そのためには、ここで出会った回復者が、本当はどのような生き方をしたいのか、少しでも本心が聞きたいと思う。テルスキの療養所にいたはずの無名の画家は、芸術を通してそれを表現したのではないのか。今回のような療養所を巡る旅は、私にとって大変重要な使命であり、今後も精力的に続けていきたい仕事である。

ぶらり広島・呉・厳島

耳鼻科 丹藤 淳

「教師たちは何を考えているのだ。彼らはここにいる私たち学生を、学びのために引率しているのではないのか・・・。」

春先に実家から連絡があり学生時代の荷物を引き取りに行くと、その中に高校時代の修学旅行文集があった。そこで私は怒っていた。引率していた教師に、戦争に、原爆に。

高校時代の修学旅行は関西方面で、選択コースの中から私は広島を希望した。祖父から聴いた戦争の悲惨の最たるものが、空襲と原爆であると感じていたからである。その原爆が投下された広島を是非見てみたいと思った。戦争の惨禍を伝える原爆ドームは、二十数年前にも熱い日差しの下、赤黒いむき出しの鉄骨をさらして川沿いにたたず

んでいた。

今回九月二十七日から二十八日にかけて日本看護学会老年看護学術集会が行われたのが、広島市内にある国際交流センターであった。奇しくも高校生の私が怒っていた原爆資料館の一角である。あの修学旅行の日から二十数年たって、大人になった自分が、またそこに立っていた。そしてまた学びに来ている。春先の文集を発見したことを極めて因縁めいて思えた。

老年看護学術集会では、取り組んでいる摂食嚥下障害看護、口腔ケア、認知症ケアなどに関する最新の事例報告や、各施設での取り組みについて意見交換ができた。特に当園で取り組んでいる嚥下リハビリや口腔乾燥に対するケアについては貴

重な意見が全国の施設から得ることができ、今後のケアに活かせる手応えを感じた。一日目の発表を聴き終えて投宿したホテルに戻り、ベッドに体を横たえると改めて高校時代の自分に思いを寄せた。

京都市内のホテルを拠点として各見学コースを巡る修学旅行の日程中、広島コースが一番遠く、早朝から新幹線で現地に向かうにしても、半日で平和公園・原爆資料館と厳島神社を見学するにはあまりにも強行軍だったのだろう。一時間足らずで原爆資料館を見学した。引率教師から「時間がないから急げ」と言われ、苛ついていた。そして目の前には八時十四分で時を止めた時計や、人骨を内包したガラスの破片、影のみを残して一瞬で蒸発してしまった人の思いを焼き付けた石。全てが戦争に対する怒りと悲しみが充滿していた。見たいと自分から望んで向かった広島で、心ない教師への怒り、そして戦争に、原爆に対する怒り。若かりし日の自分が広島でわき上がった感情は怒りしかなかったのだろう。記憶の中でも、文集の中でも当時行ったはずの厳島神社については全く

残っていない。



原爆ドーム

会場が原爆資料館の隣接していることもあり、空き時間を利用してゆっくり見学することができた。被爆者の着ていた血の付いた衣服、黒焦げになった弁当箱、赤くさび付いた三輪車……。展示物のひとつひとつに解説がついていて、そこには一瞬にして消えた命、被爆した後のたうち回る苦しみの中、祖国にも敵国にも恨み言一つ言うこともできず逝ってしまった人々の思いが書き込ま

れていた。あらためて原爆の惨禍について目の当たりにし六十七年前の悲劇に怒りを覚えた。そしてわずか一時間足らずではとても見学はできないなと思った。

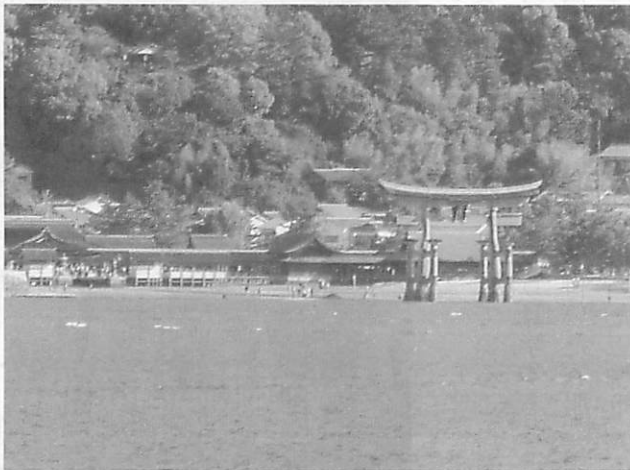
学会二日目ポスターセッション、シンポジウムなど参加予定の内容を消化し、無事閉会式を終えた私が向かったのが、厳島神社だった。

折しも大河ドラマ「平清盛」の舞台となつている当地は、国内はもとより世界各地からの観光客であふれていた。広島市内から約四十分ほど市電に乗り、宮島口に着くと夕方近くになるというのにたくさんの方が対岸に向かうフェリーを待つていた。ほとんど待つこともなく乗ったフェリーで十分ほど行くとあの大鳥居が見えた。

世界遺産宮島厳島神社はあの海に浮かぶ大鳥居と社殿以外にも、仏殿、宝物殿など多くの建造物が置かれ、島全体が文字通り遺産であった。

そして人以上にいたのが鹿である。神の使いとして元々居た鹿が神聖化され、大事に扱われているのだが、大事に扱われすぎて、観光客にはいささか厄介な存在となつている。手元にちり紙の一

枚も持とうものなら、えさと間違えて多くの鹿が集まつてくる。まるで日光の猿のように観光客慣れた鹿は、傍若無人だ。



厳島神社の大鳥居

わずかな滞在時間であったがまるで初めて行っ

たかのように、史跡に親しみ、「平家にあらずんば人にあらず」とまで言わしめた平家の栄枯盛衰を感じた。祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり・・・と昔覚えた一説が脳裏をよぎった。

わずか二日間で世界遺産を二カ所巡るといふ贅沢ができるのも広島ならではの事だと思ふ。共通するのは厳島神社も原爆ドームも共に今では世界中の人々の祈りの場となつてゐることであらう。

学会日程はすべて終了したのだが、飛行機の関係で半日ほど時間が空いたので、以前より気になつていたのだが、なかなか行く機会のなかつたところを訪れることとした。

そこは「呉」である。

母方の祖父が戦時中、海軍の空母に乗つていて整備兵をしていた。幼い頃から空母での話は寝物語に聞かされていて、母港としていたのが呉であつた。今でも呉は海上自衛隊の基地があり、それほど大きくは感じないが軍港と呼ぶにふさわしい街である。駅を出るとすぐそこに大きな潜水艦が展示してあつた。それを目印に進んでいくと「大和ミュージアム」がある。悲劇の戦艦、私の

世代にとっては宇宙戦艦ヤマトのモデルとなつた艦、戦艦大和のことを紹介する博物館である。

大和ミュージアム（正式名称：呉市海事歴史科学館）の玄関先には海の守り神ポセイドンの像が置かれ、その横に連合艦隊の旗艦を務めた戦艦「陸奥」の砲身が展示されている。



大和ミュージアムにて

中に入ると空間全体が旧日本海軍の資料の宝庫であった。フロアーのど真ん中に十分の一に縮小された大和の模型がかつての威容を示して、訪れた者を迎えてくれる。他にも零式艦上戦闘機いわゆる零戦に始まり、過去に日本の海上防衛を担ってきた兵器のこと、呉の歴史、そして戦艦大和の歴史が展示されていた。

私の祖父が語ってくれたことが頭の中によりみかえってきて、祖父とまた話をしている気分になった。戦争の歴史は悲しさに満ちあふれている。しかし国を守ろうと戦った人たちもそこに居ただけだと強く感じた。

歴史は相反する要素を多く含んでいる。矛盾することも併存して成り立っている世界なのだと思う。原爆ドームと大和ミュージアムはどちらも戦争の歴史に大きく関わっているが、なぜか相反する物として感じてしまう。それも歴史なのだろうと思う。

今回、学会に参加し、自分の知識を増やすことと同時に、過去の自分にも何かはじめのようなものを付けてきた気がする広島の旅となった。



宮島の鹿



学術集會会場にて

証「イエスは私を救った」 3

—「ハンセン病裁判」を振り返って—

神子澤 新八郎

社会生活にもピリオドを打たなければならぬ時期が参りました。それは私の親代わりの泉きよさんより、園内で結婚した盲目のご主人が倒れ、自分も血圧が高く看病できなくなつたので、松丘に帰つて来て欲しいとの速達を頂きました。その時、下松教会牧師藤田祐先生が私たちを伝道礼拝に招いて下さつた時のことが思い出されました。

それは牧師館の一室でお父様の藤田恒男先生がリュウマチのためベッドに臥しておりました。私たちがお見舞い申し上げたところ、あなたをわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである」と、ヨハネ15・16の御言を下さり、神子澤兄弟よ、松丘に帰つて一生懸命に伝道しなさい」と励まして下さいました。

藤田先生は大正十年より松丘に伝道し、戦後から隠退されるまで松丘聖生会を牧会伝道して下さいました。その藤田先生が昭和五十五年八月三十日、聖国へ召されて参りました。藤田先生のあの時の励ましの言葉が再び思い出され私たちは帰園を決心し会社に辞職願いを提出して、昭和五十六年九月三日松丘に帰つて参りました。

昭和五十五年四月十日より、妻の母が高齢のため病床に臥し、天国へ召されるまで、妻が看護して上げること感謝し、天国で待つているから」と両手を握り、お祈りをしてイエス様の御許に召されて参りました。

その年の春、私たちは日本キリスト教団・千里丘教会に教籍を移しておりましたので、牧会者安

藤洋介先生に松丘保養園へ帰らなければならぬ、特別な事情を相談しましたところ、長老会に諮り、快く諒承してくださいました。

最後の夕べ、安藤先生は牧師館に私たちを招待し、御家族の皆さんで送別会を開いてくださいました。

安藤先生はお別れしてからも、また北九州市八幡西教会へ転任されてからでも、毎年六月には松丘聖生会を訪問され、第三主日礼拝説教とシロアムの集い（盲人）、落穂の集（婦人）の集会で御言を学び、その他病棟と故人の部屋を訪ね尊いお祈りをしてくださいました。

このように、安藤先生はイエス様がベタニヤに、ラザロ、マルタ・マリヤを訪ねて下さったように、小さき群を限りなく愛され、今日に至っております。ハレルヤ！

私たちを待っていたものは、MOLの理事でした。MOLは長島聖書学舎で学び卒業した者たちが中心になって設立した団体で、昭和四十五年に発足してから三十周年を迎えました。その目的と使命を果たすために、らい園教会の信仰の証しと

祈り、外部教会のハンセン病に対する正しい理解と献金の協力によって運営されて参りました。

MOLの目的と使命を果たすため理事会を組織し、理事長・事務局長・広報編集部・伝道部・文書伝道部を置き、沖縄から北海道まで伝道し、らい園教会の歴史と兄弟姉妹の証しを文集にして発行しました。私はこのMOLで編集と事務局を十五年間、妻の協力によって奉仕させて頂きました。現在、私は松丘聖生会の会長に選ばれ、市内の日本キリスト教団の三教会の牧会伝道と、津軽地区教会の牧師による説教応援を頂いて今日に至っております。

この度、皆さんの暖かい愛の励ましによって、“奇妙な国”の悪法が原告団と弁護団と正しい裁判によって国賠訴訟が勝利しました。九十年以上も続いた「らい予防法」によって強制隔離政策が間違っており、憲法違反であることを国は国民の前で認め、私たちに謝罪しました。

三人の証人の中で、国とハンセン病学会に君臨した光田健輔先生に仕えた犀川一夫先生は「四十年前にらい予防法は廃止されるべきであった」と

証言し、長い間、厚生省の療養所課長を勤めた大谷藤郎先生は「国や関係者が長年に亘って患者さん方を追い込んだ責任を感じている」と証言し、特に、らい医学の権威者光田健輔先生に反対の立場をとった小笠原亮先生の弟子である和泉眞蔵先生が「やはり正しいことを述べて、過去が間違っていたことを証言せざるを得ない。これは医師として最低限の良心である」「公正な審判を下す最後の機会に」と訴え証言されました。

このようにして、「らい予防法」と懲戒検束規定によって、長い間隔離政策を取った国と昭和二十六年「手錠をかけても強制収容が出来る法律を作るべきである」と国会で意見を述べる光田健輔園長と林芳信、宮崎松記と日本ハンセン病学会が、熊本・岡山・東京裁判によって国民の前で裁かれたのであります。

私の姉は国の謝罪と補償を待たないで、平成十三年三月二十七日亡くなりました。

もし結婚して病気が再発したなら、主人や子供に対して一生償うことができない責任を感じて、独身を貫きました。

しかし、百年前に外国の宣教師たちが、日本のハンセン病者に愛と救いの手を差し伸べて下さり、さらに石館守三先生によって開発されたプロミンによって、私もらいという病気が完全に癒され、らい園でキリストの十字架と復活の福音によって救われたこと、さらに、懐かしい故郷へ帰られなくとも、復活栄光の体に変えられて、永遠の天国に迎えて頂くことを心から感謝しております。

ただ今、皆さんに貧しい証しをさせて頂きましたが、松丘に行くと言われた私が、七十五年間も生かされて参りました。私は地獄のようならい園で人間復活の喜びの日を迎えました。本当に奇蹟であります。それは今も生きておられる主イエス様と出会い、尊い救いを与えられているからであります。

私の人生で、よき師・よき友・よき本が与えられ、その尊い出会いによって導かれ、さらに、よき養母・よき妻が与えられて今日あることを心から感謝しております。

その泉さんが、昨年十二月二十一日臨終とな

り、福西園長先生、小田桐総婦長さんと看護婦さんたちに看取られつつ、安らかに天国へ召されて参りました。しかし、生まれ故郷へ帰れない泉さんの遺骨を、私たちは妻の母の遺言通り、石井家の十字架の墓に埋葬してあげました。いずれ私たちも参ります。

人は、どんな境遇の中に置かれても、何かの使命が与えられております。聖書は、それは神の選びと使命である」と教えております。私はらい園の中で小さな病める存在でしたが、神の選びと使命があつたことを体験として学びました。

私は熾烈をつくしました、三年間に亘るハンセン病裁判を振り返って、原告の皆さんと弁護士の方々に對して深い反省と責任を痛感しております。

しかし全療協も、その中の一部である松丘支部も、ハンセン病の医療と療養生活の現在と将来を考えると、国賠訴訟に参加できませんでした。ただ松丘より二名が原告に加わつただけでした。

私は、らい予防法闘争の時も、この度の違憲国賠訴訟の熊本、岡山、東京裁判の提訴に最後まで

加わりませんでした。

平成十二年四月八日松丘保養園で開催された全療協（支部長）会議において初めて国賠訴訟提訴を指示することを決定しました。

このように全国の療養所から三分の一の療友がコミュニストもクリスチャンもノンクリスチャンも、人権の問題として死力を尽くして戦い続けました。

最後の岡山裁判が平成十三年五月十一日、熊本裁判において、原告側が完全勝訴しました。

松丘はこの時点で三十名が全国組織のハンセン病国賠訴訟全国原告団に加わりました。しかし、私は松丘聖生会の兄弟姉妹と共に加わらず、信仰の先輩たちに学び、ただひたすら教会で神様の御心を祈るだけでした。

ついに国賠訴訟に敗訴した国は控訴を断念し、告訴した者にも、告訴しなかつた者にも賠償金、あるいは補償金を支払うことを約束しました。

その時私は、濡れ手で粟を掴むようなことは出来ないと思ひ返上しようと思ひました。しかし、私は神様が一番喜んで下さることは何か、よく考

えてみたときに、教会や牧師、ミッシヨンスクール、救らい団体、その他福祉施設へ献金、あるいは寄付することではないかと示され、全部を捧げてしまいました。

私は「らい」になって、二つの奇蹟を経験しました。

それは第一に不治の病と言われたハンセン病が石館プロミンによって完全に癒されたことです。

第二に地獄のような「らい園」で、キリストの十字架と復活の福音によって永遠の生命と栄光の天国に救われたことです。

本日、私たちは聖書の中から一人のらい病人とラザロの復活物語をテキストに選びました。私たちにとって、二千年前の奇蹟は、また私たちの経験した奇蹟でありました。

今から十五年前（昭和六十三・三）、私と妻は中山年道先生と聖地旅行をさせて頂きました。それはMOLの賛助会員であった四国の高松に住んでおられる、八十歳の山崎力ノ子姉からの多額の献金によるものでした。私たちの生涯で最高の喜悅の日でありました。

この巡礼で、私たちにとって忘れることのできない出会いは、祝福の丘よりガリラヤ湖へ降りる、聖地の美しい花が咲き乱れる草原でイエス様に癒して頂いた一人のらい病人の姿を私たちの姿と重ねて、涙の中にひれ伏して感謝の祈りを捧げることが出来ました。まことに我が生涯の最高最良の日でありました。

もうひとつ折って準備して参りましたベタニヤはパレスチナ人のインテファードで、ラザロの墓を訪ねることは出来ませんでした。

しかし、イエス様の十字架への道とゴルゴタの丘と園の墓を訪ねることができました。

このように、一人のらい病人の癒しも、ラザロの死と甦りもまた、私たちハンセン病の癒しもイエス様の十字架と復活によって救われていることも、すべて神の栄光のため、また神の子が栄光を受けるためであることを体験として学ぶことが出来ました。

このように、ラザロのために涙を流されたイエス様は、私たちハンセン病患者のためにも涙を流し、今も愛しておられるのです。

いま、日本の聖書からも、世界の聖書からも、「らい」という病名が消えようとしております。

すでに日本の聖書から「らい病」は「重い皮膚病」に変えられました。

しかし、イザヤは「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で病を知っていた」とメシヤを預言し、救主イエス様はマタイとルカによる福音書でマタイ11・45 ルカ7・22「らい病人はきよまり、貧しい人々は福音を聞かされている」と告げております。

私たちは聖書の中から、どうしても「らい」を無くしなればならないとしたなら、イエス様がいらい病人を癒して下さった奇蹟も福音も否定されるのではないのでしょうか。

このように、イエス様はらい者である私たちを救って下さいました。この信仰告白は私たちの信仰の原点であることを告白して、貧しい証を終わりたいと思います。

(おわり)

※2003年7月6日の青森戸山教会での講演内容を掲載しました。年代・病名等は当時のまま掲載いたしました。

人事異動

【採用】
看護師 今 寛子(病棟勤務)
(平成二十四年七月一日付)

【退職】
栄養班長 藤本 美香
(平成二十四年八月三十一日付)

【退職】
外科医師 脇屋 太一
(平成二十四年九月三十日付)

【採用】
外科医師 櫻庭 仲悟
(平成二十四年十月一日付)



野の花の微笑^{ほほえ}み

比良信治

恵子との出会い
(3)

宿泊所に戻った文太郎は食堂のテーブルの真ん中頃に、ケヤキの森からとってきた福寿草を置く。缶詰の空き缶を利用したが、二つの黄色い花が羽を広げたように咲き匂っている。殺風景な食堂にも暖かい灯りがともされたようである。

文太郎は病棟へ戻った清水恵子を待っていた。食堂のテレビのスイッチを入れてのぞきこむ。療養所の午前中は、入所者が診療に行くので、診療部門は利用者で溢れる。

文太郎の母も歩けるので、まず眼科に行き、二番目に内科に向かう。母は十年前の高血圧症で右

目の視力をほぼ失い、左目も毎日点滴を受けて治療を続けている。昨年胃腸のポリープを手術した後、一昨年胆嚢の手術をしてからは便秘するようになり、調子が悪く大便にも苦勞している。老いの病かと悩む日々である。

二人の高齢者はベッドで医師の診察を受けるので、午後のはじめ頃に見える医師を待つ。

若い清水恵子は、今のところ毎日診療を受けていないようだが、福寿草を部屋に飾ったら駆けつけると言う。

灰色のトックリセーターを着た清水恵子がまもなくやってきた。おかつぱの彼女が微笑むと、円い顔の左右に小さな笑窪ができる、それが愛らし

く思える。彼女は黄色い小型の箱を文太郎に差し出した。キャラメルである。

「ごちそうさんです。おふくろは診察中ですね」

「そうよ、まだまだだね。おひるどきに行けばいいんじゃない」

文太郎はキャラメルを口の中に入れると、

「ぼくがしっかりとっておれば、家に帰ってきて欲しいんだけどー」

「あなたしっかりとっているんじゃないの。それともお嫁さんをもらつていないから、というのね？」

恵子もキャラメルの白い皮をむいて口に入れる。

「そうなんですよ、色々とおつてね、一人でいる方が暮らしになれちゃつてねー」

父が元気でいたなら、結婚していたであろうが、チャンスを失つてきた。

「あなたはお一人じゃないでしょう？」

恵子の顔をよく見ると、目元の付近に薄い皮を張つたような痕跡が見える。

「そうね。でも今はひとり者。多磨全生園にいた時に結婚したんですけど、夫は亡くなりました。

故郷に近い青森に移つてきましたの」

「おいくつですか？ご主人はどういう方でしたか？」

文太郎は聞きたいと思つたが、質問はのみこんでしまう。

「あの柵の垣根の多磨全生園ですね。春には桜の並木の花が美しくて有名ですね。学生時代に二回程友人と行ったことがあるんですよ」

「あなた、桜の並木を知っているのね。花見どきは何千人という人が訪れるのよ。でも普段は出入りはまだ閉じていた頃ね。このように自由に出入りがまだ出来なかつたんですよ」

「そうそう、一回だけど、花見に行った時に所内の中に入つてね、図書室に入つたことがあるんですよ。北條民雄という作家がいたんですよ。ぼくの友人はその人の作品を読んで感動したと言つて、のぞいたんですよ」

「えーっ、それはすごい。あなたは北條の小説を読んだの？」と彼女は目を輝かせて文太郎の目を見つめる。

「ぼくはまだ読んでいませんー」

彼女はテーブルに両手をおいて、

「文太郎さんにも読んでほしいわ。わたし持っているからお貸しするわ—」

彼女は立ち上がって窓の方に近づいて、青い空を眺めながら、

「わたしね、若くして亡くなった北條民雄のファンなのよ。あの図書室は北條にとつても大事な場所だったのよ。川端康成さんの力添えで文學界賞をいただいた『いのちの初夜』の一節を暗記しているのよ」と言つて、窓ガラスの近くにある青い葉をなびかせる木々を見つめて語り出した。思つたよりやさしい声だった。

「—尾田さん。あの人達の『人間』はもう死んで亡びてしまつたんです。ただ、生命だけがびくびく生きています。なんとという根強さでしょう。誰でも癩になつた刹那にその人の人間は亡びるのです。死ぬのです。社会的人間として亡びるだけではありません。廃兵ではなく、廃人なんです。けれど、尾田さん、僕等は不死鳥です。新しい思想、新しい眼を持つ時、全然癩者の生活を獲得する時、再び人間として生き復るのです。復活、

さう復活です、びくびくと生きている生命が肉体を獲得するのです。新しい人間生活はそれから始まるのです。—

今読んだ所が好きなんですよ。癩になつた時に人間が亡びる、廃人になる。全生園の光田健輔院長はそう言い切りました。たしかに、癩病の病院には出口がなく、癩者を死ぬ迄こき使い、最後は納骨堂に押し込めてしまう。それが国のためだと言ひ、光田院長は仏様にも、イエス様にもただひたすらに両手を合わせて祈ればいいのだと言つていたので—」

「その、癩者は廃人にさせられ、死者にさせられるというやり方は正しいのでしょうか。良くなつた人もいるのに、故郷に返さないとというやり方は正しくないではありませんか—」

文太郎は感じていることを述べて彼女の方に目を向けた。

「普通の病気の場合はあなたのいうように良くなつたら我が家に帰るわ。しかし、この病気の人には帰る家が無いわ。わたしの父とわたしが癩者だということ、家は壊されてしまい、残つた家族

は分散してしまい、わたしの弟や妹は、父と同じようにわたしも死んだことになって、この世にいないようにされているのよ。そうしないと結婚もできなかったというのよ」

彼女は椅子に座ってうなだれていた。文太郎は療養所の人のそういういきさつを聞いていたので、「うーん」と言つて両腕を組む。

「この病氣は葉が無い時代はたしかに廃人になる迄、死ぬ迄病院に閉じ込めていたわ。この病氣は恐ろしい病氣だと世間の人に信じ込ませていたから、いったんこの病氣になったら絶望ね。しかし、北條民雄は新しい思想を持つ時、新しい眼を持つ時に癩者は新しい人間として復活するといふのよ。この考えに共鳴した患者が全生園にいて、特に若者は文芸活動を活発に始めたのよ」

清水恵子は想い出したのか微笑んでいた。文太郎はその表情を見て質問する。

「あなたは新しい思想をみつけたんですか？ さしつかえなければ教えて下さい」

「人間が復活する眼は宗教だと思つたわ。わたしも悩んだわ。いきつくところはキリスト教だっ

たの。色々宗派がある中でわたしは自分の目と考えてカトリックの教会にたどりついたわ」

「それじゃ幸せをつかんだのですね。よかつたですね」

「でも悲しいことに、教えて下さつた北條民雄は昭和九年五月全生園に入院し、三年余して十二年十二月に二十四歳で亡くなつたのよ。しかも、彼の郷里徳島県の故郷の墓に、父親が遺骨を引き取つて墓に入れて下さつたけれど、父親が亡くなると、残る親族が民雄の墓文字を削除したというのよ」

「ひどいことをするんですね。それ程きらわれていたというんでしょうか。でも、彼の文学上の名前は消すことはできませんね」

文太郎も首をひねる程驚いた。それは恐ろしい犯罪者の名を消すようなやり方だと思つた。が、病にかかつた当事者や家族にとつては生涯つきまとうだけに、癩の名を隠したがる気持ちは理解できるが、新しい思想、新しい眼を持たねばこの悪魔の壁を乗り越えることはできないと、文太郎も思つた。

昼食どきになって彼女は病棟に帰った。文太郎は病院より提供された食事をすますと、病棟の母の部屋に顔を出して、引き下がった。

食事の後は二人のおばあさんは昼寝をして、一時すぎには医師の診察があるので何うことができなかった。

文太郎は病棟より少し離れた庭にある図書室に向かった。平屋の一戸建てで、玄関より入って右手に畳の大広間があり、左手に図書室があった。南側より太陽が入って明るく、暖かった。

癩病の文献や各療養所の出版物のほか、一般の小説や文学書が多く並んでいた。文太郎は、北條民雄の本がどの位あるか見たかった。

『いのちの初夜』の単行本は誰か借りているのか無かった。『北條民雄全集・上巻』と『下巻』(昭和十三年・創元社刊)の二冊があった。北條は三年半の中で、五十以上の短編と随筆を書いた。さらに日記や書簡も残されて収められていることを知る。

窓際の机の前の椅子に腰をおろしてその本を開く。

まず、『いのちの初夜』を見つけ出して清水恵子がのびやかに朗誦した一節をさがし出した。文太郎は改めてその個所を読んでみる。生命だけがぴくぴくと生きている、という表現がおもしろいと思つた。池や沼にいる蛙の大きな眼やおなががぴくぴくと浮かんでくる。人間が死ぬ間際にぴくぴくと瞼を閉じていくのではないか、等とくだらないことを頭のなかに浮かべている。

ふと『癩院記録』という随筆が目にとまる。

―「病舎は今のところ全部で四十六舎、枕木を並べたように建てられている。不自由舎と健康舎とに大別され、不自由舎には病勢が進行して盲者になつたり、義足になつたり、十本の指が全部無くなつたりすると入れられる―」と読んで、文太郎はぎくつと驚く。十本の指が全部無くなるのは、足の指もそうだな、と思つて冷やっとする。全生園は入所者を缶詰のように詰め込んでいた。

―「牢獄を背負つて歩いてゐるようなものです。―内も外も、みな敵ばかりです。癩者はポロ靴のやうに療養所といふごみ箱に捨てるのが人類の正しい発展となるでせう。自分がポロ靴であること

を意識しました―」

すごい表現だと文太郎は思った。癩になると、それだけで病状も経過も一切関係なく「恐ろしい伝染病だ」と医者や役人が言いふらしてゆく。だから（内も外もみな敵ばかり）と患者狩りをしてお召し列車に乗せて牢獄の療養所にぶち込まれる。それが（人類の正しい発展）と、社会防衛という無謀なやり方を正当化してすすめる。（癩者はポロ靴）といい、その土方飯場のような療養所を（ごみ箱）と、全生園の光田健輔院長への批判は痛烈ではないか。と文太郎は思った。

二十一歳の青年が心から叫ぶのである。その青年をノーベル文学賞の川端康成という大作家が推奨するのである。彼の葬儀も川端さんが療養所にかけつけてお世話したという。川端さんは天上の人ではなく、名も無い北條民雄という青年をこよなく愛した人であると思う。文太郎は、川端さんは立派な人だと思う以上に、尊敬し、感謝したいと思った。

清水恵子がかぎつけて図書室にやってきた。

「やっぱりね、えらいわ、わたしの好きな北條民雄の作品をさがしたのね」

彼女は微笑んでいる。笑窪が可愛いと文太郎は思った。

「折角ここまでできたんですから、この裏手に教会があるのよ。わたしは聖書を取りにいきたいのでごいつしよしない？」

と言つて、彼女は図書室の裏口へ向かった。裏口を出ると教会のような建物が並んでいる。その左手の赤い尖塔の建物がカトリックの教会だった。その寺社通りを歩き出した時、奥の方の火葬場から黒い喪服を着た数人が歩いてきた。先頭のおじさんが白い布の骨箱を持っている。文太郎も清水恵子も立ち止まって黙礼した。文太郎は、その遺骨が郷里のお墓に入るように祈った。

二人は教会の中に入った。教会の入口の近くにオルガンがあった。椅子は二、三十席もあつたろうか。正面にイエス・キリストの写真が飾られ、その上に木彫りのイエスの像があつた。

「小さいけれど、毎日曜のミサ礼拝は十四、五人の療養所の人のほかに、市内の信者さんや藤聖

母園のシスター方も見えるのよ。だから二十四、五人になるわ」

「神父様は市内からおいでになるんですか？」

「そうなの、青森にはカナダのケベックよりの神父様がいらしてるのよ。日本語も上手で楽しいですよー」

彼女は聖書を手にすると、「お母さんがお待ちかねよ」と、振り向いて急ぎ足で教会を出た。

二人が病棟に戻ると、母はベッドのそばの椅子に座って微笑んで待っていた。

「診察はすみしました。あなたは恵子さんに北條民雄さんのことを教えられたんでしょう。お母さんはね、変わった本をお見せしたいのよ」

母は汚れた冊子を開いた。それは「北柳吟社」という川柳の作品集であった。

文太郎が驚いて頁をめくると、紙くさい匂いがしてくる。

「昭和四年の創立というから、すごい歴史を持つっているんだね。母さんも入っているの？」

「わたしはまだ見よう見まねだね。向かいのきよおばあさんが大先輩なのよー」

聞こえたのか、首をのぼしておばあさんが、

「もうつくれませんが、あなたのお母さんはわたしにかわって勉強して下さるのよー」

やさしく微笑んで首をすくめる。文太郎もほっとして、

「そりゃよかった。母さんつづけてよ」

と、古い作品集を開いて読んでいく。

癩者われ水の音かや明日の音
小山史陽

故郷を出たその日の涙今も拭き
高野明子

風も哭け雲も哭け哭け母死んだ
青葉香歩

家出して母の寝顔が目に残り
八重沢かほる

治らない病気の時代の作品から拾っていく。

夢に来て母は涙を拭いて行き
青葉香歩

世が世なら家継ぐ夢をくり返し
藤久悦

叫んでも届かぬ故郷へ呼びかける
原七星

うすれゆく視力へ母の写真出し

荒尾苔華

悲しさも喜びも洩れるベニヤ壁

藤 久悦

マヒの手の軽石に似た肌触り

山野辺昇月

泣いて泣いて泣いて義足が立上り

田畑夏泉

神の道学ぶ点字を辿る舌

猪狩子面坊

義足とは知らず落葉がからみつき

茅部ゆきを

遺影無き葬送聖歌第二六六

杉野草兵

文太郎はそこで読み終えたが、胸の中がじいんと熱くなっていた。どの作品も、北條民雄にまさる文学の高さが光っているのではないかと感動した。母は文太郎の眼を見つめて、

「どの作品も当時の園の暮らしが歌われているでしょう。涙が出るわ。母さんね、俳句も好きなんだけど、素直にくらしをよむ句をつくりたいと思つて勉強をはじめたのよ」

六十歳代に入った母は、老眼鏡を必要としているが、元気を取り戻したので、文太郎の心は明る

かった。隣にきた若い女性も今迄にないタイプで、訪ねる楽しさが増してきた。今迄未知だった癩文學や宗教にも、目をむけていく楽しさが生まれてきたと思つた。

(つづく)

自治会日誌

○印 自治会

八月中

- 2日○第20回執行委員会
6日○第21回執行委員会
○青森県の招待により青森ねぶた祭りを観覧
7日 センター花火観覧
8日○本部長に本部事務局長代行として出席の為、
石川会長出張（～9日帰園）
○保健科ふれあい訪問
9日○女 九十六歳死亡 北海道出身
15日○第22回執行委員会
17日○地区連絡係定例集会
22日○「癒やしの心 慰問の集い」三内自然環境保護
の会
23日 五所川原市立看護学院見学実習
○厚生労働大臣面談の為、石川会長（本部事務局
長代行）出張（～24日帰園）
24日 歌つこ広場
31日○倉橋建設㈱倉橋純造代表取締役、他2名来訪

九月中

- 2日○自治会選挙管理委員会開催
3日○自治会選挙 立候補受付
5日○自治会選挙 投票及び開票
○松風塾高校22名によるマンドリンオーケストラ
演奏会
6日○保健科運営委員会
7日○厚生省国立病院課 渡辺政策医療推進官、江口
国立ハンセン病療養所管理室長補佐来園、正副
会長が対応
11日 平成24年度病院立入検査
ゲートボール愛好会バスレク（平内）
12日○保健科ふれあい訪問
13日○平成24年度敬老会
14日○第23回執行委員会
○第1回次期執行委員組織会
○地区連絡係定例集会
19日 一般寮ふれあいツアー
20日○第24回執行委員会
○厚生省25年度予算報告会に出席の為、石川会長
（事務局代行）出張（～21日帰園）
21日 弥広神社例祭

21日 歌つこ広場

26日○赤旗東日本総局 唐沢俊治記者来訪

28日○第24回執行委員会

十月中

3日○青森市職員研修で石川会長が講演

5日○第1回執行委員会

9日○全療協本部神会長が「職員増員・療養環境改善等要求貫徹意見交流」の為来訪、自治会執行部と意見交流

10日○神会長と自治会会員（午前）、職員（午後）が意見交流

11日 中央センター2階お買い物ツアー（ガーラタウン）

○「職員増員・療養環境改善等要求貫徹意見交流」で東部ブロック各支部を訪問の為、石川会長が全療協神会長に同行（23日帰園）

14日 函館ひとみ会来訪

15日○地区連絡係定例集会

16日○平成24年度物故者慰霊祭

17日○保健科ふれあい訪問

19日 国立療養所栗生楽泉園創立80周年記念式典

（園長出席）

19日 札幌弁護士会来園（20日）

〃 ○栗生楽泉園創立80周年記念式典に石川会長が出席

25日○第2回執行委員会

26日 歌つこ広場

27日○秋田県主催「ハンセン病問題に対する理解を深めるための講演会」で石川会長が講演

29日○湯沢地区結核予防婦人会慰問

30日○甲田の裾編集局企画運営会議

31日 厚生病院附属看護専門学校施設見学

○勸双仁会厚生病院附属看護専門学校 看護科24名来園、石川会長が講演

編集後記

◇豪雪・寒波から始まった平成二十四年。厳冬が過ぎ去ったあとの桜はいつそう美しく園内を彩りました。全国的な猛暑は北の療養所にも例外なく訪れ、入所者・職員も苦勞しましたが、あつと言う間に紅葉の季節となりました。そして暦も残すところ、後一枚。雪の季節は憂鬱ですが、新年に向けて気持ちを新たに臨みました。今年一年ご愛読本当にありがとうございます。

（編集委員）

園内の出来事

○全療協本部意見交流会 (10月11日)



全療協・神会長が各療養所を訪問して行う意見交流会の東部ブロック第一弾が松丘で行われました。

○平成24年度物故者慰霊祭 (10月16日)



福西征子園長の祭詞のあと、全療協交流会に随員の石川会長に替り、佐藤副会長が祭詞を代読しました。

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で103年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地

青森市大字石江字平山十九

園長 福西征子

保有敷地 二三〇、五四八平方米

(六九、八六三坪)

建て面積 三〇、三五八平方米

(九、一九九坪)

延べ面積 三六、〇三六平方米

(一〇、九二〇坪)

交通案内

□電車の便

1. 東北新幹線・新青森駅下車

(車で約3分)

2. 奥羽本線津軽新城駅下車

(車で約5分)

□バスの便

1. 青森市営バス西部営業所行

2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石

行き 共に松丘保養園前下車

□航空機の便

青森空港より(車で約30分)

□高速自動車道の便

青森ICより(車で約5分)

□なお保養園に隣接して桜の名所三

内霊園(1km)と国の特別史蹟指

定の三内丸山縄文遺跡や県立美術

館(2km)等があります。

発行所

財団法人 松丘保養園慰安会

所在地

〒〇三八―〇〇〇三

青森市大字石江字平山十九番地

電話 (017)(788) 〇一四五・〇二四六

発行人 福西征子

編集人 甲田の裾編集委員会

印刷所

青森市本町二丁目十一―十六

青森オフセット印刷株式会社

電話 (017)(775) 一四三一―番